

## 「糸のみほとけ」展の展示評

白鶴美術館顧問 山中 理

「糸のみほとけ」とはなんとほんやりした響きでしょうか。まず、題に惹かれました。そしてこの展覧会で教えられました。鎌倉時代以降にこれほど豊かな繡（しゅう）の世界が練り広げられていたとは思わず、ましてや、中国の繡（しゅう）（第五章）はほとんど念頭にものぼったことはありません。少し考えてみればそこが出発点なのにお恥ずかしい限りです。

いつもなら最後に降りていたスロープを逆に上って左に曲がりますと、目に飛び込んできたのが第一章の「天寿国繡帳」（中宮寺蔵）で、画期的な展示構成の幕明けです。展示位置が刺繡の細部を肉眼でも鮮明に見て取れるほど近く、浮世絵版画の微妙な凹凸同様、間近でこそその醍醐味を味わうことが出来ます。即ち、発色の美しい諸（もろ）糸を使用した単純で力強い返し繡（ぬい）の飛鳥時代の原刺繡に比して、素人目には無残なほど薄茶色に退色してかなり劣ると思えた甘い撚（よ）り糸と撚りのない平糸を併用した鎌倉時代の新刺繡が実は多彩な繡技を駆使していると知った時、この繡帳に対する向き合い方が些（ち）か異なってきたのです。

三点出品された白鶴美術館の作品の内、「金銅小幡」の展示の仕方はユニークで意表を突かれました。「金銅小幡」は金銅板全七坪が蝶番（もようが）で繋がられています。七坪目に当たるこの小幡最下段の金具に、本来繡（しゅう）仏裂の類を挟み込んで垂下させており、小口部分に残ったその幡足裂の痕跡を見せる工夫がなされていました。その代り、あくまで金工に興味を抱く立場からですが、北壁側の全長約二メートルの展示ケース内に陳列された、大きな灌頂幡（かんじょうばん）の傍らにある「四隅小幡」（東京国立博物館蔵）の横笛を吹く天人が、「金銅小幡」のそれと微妙に違う造形感覚を示していることを比較検討するには難しいと感じました。

匣（い）巻は何と言っても第三章の国宝「刺繡（しゅう）釈迦（じやく）如来（にょらい）説法（せっぽう）図（ず）」（奈良国立博物館蔵）です。特に中尊（ちゆうそん）倚坐（いざ）像（ざう）の直下（ちか）左右（さゆう）と最下（さいげ）段列（だんれつ）で柄香炉（びやうろ）と塔形（とうがた）盒子（こ）子の両方（りょうほう）を捧持（ほうじ）供養（くやう）する俗人（ぞくじん）

一人と僧侶三人（うち一人の塔形（とうがた）盒子（こ）子は脱落）をこれほどの近さで確認出来て感無量でした。三回目の見学でやっと気付いたのが、菩薩では一番右下に位置するその裳の上に、最初は塔形（とうがた）盒子（こ）子の一部と見誤った水瓶（すいびょう）の断片（たんぺん）が貼（た）いられたことです（保存修理の際、検討の末、そのままにされました）。展示ケースの能（あた）う限り前で垂下（しげ）させたこの繡帳を見つめながら、担当者の決断、意気込みのほどを強く感じていました。

こういう大胆な試みがなされる一方で細やかな配慮に基づく繊細な展示方法も採用されています。平置き展示ケース内の刺繡（しゅう）残欠（ざんけつ）は裂帖（れっしやう）（白鶴美術館蔵）の見返し横の冒頭（まうとう）ページに貼（た）られているのですが、繋ぎの紙蝶番（しやうてつばん）が剥（は）がれている箇所もあり気になっておりました。窓（まど）を設けた全体を覆う白い箱を被せることで、目障りな部分を隠し、刺繡（しゅう）裂（れ）だけが見えるようになっていきます。北側の壁付き展示ケースでも別の裂帖（れっしやう）に同様な工夫が施（し）されていましたが、その隣の小さな古裂帖（これっしやう）だけは見返しも含めて全形（ぜんけい）を見せていたのです。作品の状態（じょうたい）が良いので折帖（せつしやう）の姿（すがた）を見て戴（た）くためにそうされたのでしよう。

第四章、第六（ろく）〜第八章（はち）の展示は繡技（しゅうぎ）が多様（た）化（か）し工芸（こうげい）的な美（み）を極（た）めた黄金（おうごん）期（き）、極楽（ごくらく）往生（おうじやう）への願（ねが）いを込（こ）めて毛髪（もうはつ）を使用した髪繡（かみしゅう）の登場（ていじやう）、最後に超絶（ちやうせつ）技巧（ぎこう）とも称（な）すべき高度（こうたう）な繡技（しゅうぎ）が施（し）された近世（きんせい）の繡（しゅう）仏（ぶつ）作品（さく品）の登壇（とうだん）へと導（みち）かれて大団（だいたん）円（えん）を迎（むか）えます。その内、第四章（しやう）に当（あた）る展示室（しやうしつ）に置（お）かれた行灯（あんどん）型（がた）展示（しやうし）ケース（挿（さ）図（ず））を見て嬉（うれ）しくなりました。大きな直方（ちかたがた）体の箱（はこ）がケース（ケース）内に納（な）められ、四面（しめん）のガラス（がらす）とほとんど至近（しじん）距離（きょり）にある各面（かくめん）に繡（しゅう）仏（ぶつ）が掛（か）かっていて、叶（かな）うならば直（ちか）に作品（さく品）を味（あじ）わって貰（もら）いたいという気持（きもち）がここでもひしひしと伝（つた）わって参（ま）ります。正（ただ）にこの「糸（いと）のみほとけ」展（てん）の担当（たうとう）者はもの（もの）に對（たい）する愛情（あいじやう）が半端（はんぱ）ないほど豊潤（ほうじゆん）で、観（かん）者の五感（ごかん）に訴（こ）え掛（か）ける展示（しやうし）を実現（じつげん）された努力（なうりょく）に對（たい）し満腔（まんかう）の敬意（けいぎ）を表（あらわ）したいと思（おも）います。



展示風景